

## カント哲学の基本問題 (二)

馬場喜敬

(平成2年9月29日受理)

### On the Fundamental Problem of Kant's Philosophy (II)

Yoshiyuki BABA

(Received September 2<sup>nd</sup>, 1990)

#### 1. 4つの問いと批判哲学の“Lücke”

1798年9月21日, Königsberg 発信のカントの書簡はクリスチャン・ガルヴェ<sup>1)</sup>に宛てられ, KrVをめぐってのやりとりが, 第一批判刊行後18年目に至って再燃するさまをみるが, それにとどまらず, 前稿(「カント哲学の基本問題(一)」)に掲げたかのカントの四つの問いに対するカントの努力の継続(これは同時に未完を意味する)も浮き彫りにされているように読みとれる。

1790年のKUの刊行をもって, いわゆる三批判書による批判哲学の仕事は, 形式的には片付けられているかにみえる。しかしカントが, 批判哲学の胎内(KrV. 1781. その第二部門「先験的方法論」)ではぐくみ, のち, 批判哲学の枠外(二つの講義「論理学」「形而上学」)で, さらに包括的に定式化したかの問い(三つの問いが, ここで四つの問いとなる)については, まだ完全の対応的著作をうるに至っていない。

その憂悶はカント自身を重苦しく包んでいるかにみえる。

まずはともかくこの書簡をみよう。—

[カントは, ガルヴェより, この年(1798年)刊行の「道徳論の至高原理の概要」(Übersicht der vornehmsten Prinzipien der Sittenlehre)とともに一通の書簡を受けとっていた。それはガルヴェが鼻翼に生じた癌性の病苦のさ中からのものであったが—ガルヴェはその年1798年12月1日死去—これに対するカントの返事も「貴方の肉体的苦痛の衝撃的な描写」にいたく感銘をうけたこと, それはそのような苦痛を無視して, 世の福祉のため, 快活な気持で, 高貴な書を刊行に至らしめた

---

教養部・哲学第一研究室

精神の力に向けられたものである, という.]

そして「私としても」とカントはいう。

私にふりかかっている運命はもっと痛ましい。私の身体はかなり好調な状態にあるものの, 精神的な仕事の面で完全に麻痺している。哲学全体(目的及び手段に関して(das Ganze der Philosophie <so wohl Zweck als Mittel anlangend>betreffen), 総決算をすべき時期にきているにもかかわらず, 完成されていない。この課題を遂行しうるとはおもうものの, まさにタンタロスの苦痛の連続である。ともあれ絶望的ではない。—さてその課題とは「自然科学の形而上学的原理から自然学への移行」(Der Übergang von den metaphysischen Anfangsgrund der Naturwissenschaft zur Physik)に関するもので, 是非とも解決したい。さもないと, 批判哲学の体系に隙間が生ずることになってしまう。Die Aufgabe, mit der ich mich jetzt beschäftige, betrifft den “Übergang von den metaphys. Anf. Gr. d.N.W. zur Physik.” Sie will aufgelöst sein, weil sonst im System der krit. Philos. eine Lücke sein würde. ...

体系の完成を欲する理性の要求は止むことなきものであり, それを果しうるという自覚も止むものではない。さて, このような健康状態, またわれわれの心情の一致の上に貴著の表現方法との一致をたずねて, 貴著を読む愉しみをはじめたところ, S. 339の注については貴論に異を申し上げたい。

私の出発点は神の存在や不死等の考察ではなく, 純粹理性の二律背反でした。すなわち「世界は始めをもつ, —世界は始めをもたない」などなどから, 第4の二律背反, すなわち人間には自由がある, —自由は存

在しない、人間における一切のものは自然必然性をもつ」に至るものです。

Nicht die Untersuchung vom Dasein Gottes, der Unsterblichkeit etc. ist der Punkt gewesen, von dem ich ausgegangen bin, sondern die Antinomie der r.V.: “Die Welt hat einen Anfang — sie hat keinen Anfang etc. bis zur vierten: Es ist Freiheit im menschen, — gegen den es ist keine Freiheit, sondern alles ist in ihm Naturnotwendigkeit”; ...

この二律背反が、私をはじめて独断的仮睡dogmatischer Schlummerからよび醒まし、理性そのものの批判die Kritik der Verunft selbstに向かわせたものであった。それこそは、理性の自己自身とのみせかけの矛盾に関するスキャンダルをおわらせるためのものであった。

以上によって、二つのことが指摘される。

- ① カントは批判哲学の体系の Lücke をいまだに感じている。
- ② 批判哲学 (od.「純粋理性批判」) の発端は理性の二律背反であった。

- ① 「批判」哲学(Kritik od. kritische Philosophie) はもともと予備学 (Propädeutik) とされ、ひたすら体系の建設を旨とする従来の哲学 (od. 形而上学 Metaphysik, それは別名, 独断的形而上学である) とは質を異にし、次元を異にするものであると明言されていた。体系は Doktrin であり、それが語られるに先立って批判が必要なのである。批判 [哲学] の体系といわれるとき、それは何を意味するか、— そこで4つの問いが浮上する。カントは第一の問い (Was kann ich wissen?) の解決には KrV があたり、第二の問い (Was soll ich tun?) の解決には KpV があたったとするが、第三の問い (Was darf ich hoffen?) には第三の批判書 KU が対応するのではなく、前稿□で引用したシュトイトリン宛の書簡 (1793年5月4日付) に依拠すれば、「単なる理性の限界内の宗教」(以下 R. GV と略記) であることになる。この段階 (第1～第3の問い) で批判哲学の全貌は三批判書で完結したのではなく R. GV が積み重ねられたのであろうか。— さらに、以上3問を含みかつ統括する第四の問い

(Was ist der Mensch?) が残っている。これについてカントは「20年以上」にわたる講義での人間学 Anthropologie in pragmatischer Hinsicht をあげ (のち1798一書として公刊)、ヤスパースは (前稿□で述べたごとく) カントの意図を好意的にうけとめた上で、カントの全著作をあてるべきものとした。ところがここで、1798年カントはなおこのような Lücke をいい、それを埋めるものとして、もはや人間学をいわず、“Übergang...” を指し示しているのである。“Übergang...zur Physik” (自然学への移行) のも<sup>と</sup>が、Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft (自然科学の形而上学的根拠) であることにも注目しよう。これは1786年の著作である。“批判”のあとになさるべき仕事として予告された“カント形而上学”の二つの部門のうちの一つである。Moral-Philosophie (Sittenlehre, Rechtslehre) が“Übergang”へのもとではなく、Naturwissenschaft がも<sup>と</sup>とされている。これは一見奇異におもわれる。それともこのような読み取りが奇異であるのか。奇異か奇異でないかはさしおいて、“...zur Physik” が、第1～第3の問いが話法の助動詞を使っていい表わされた、すなわち仮定の世界であるのに対し、第4の問いは、直説法の表現に一転し、この事実を追及しようとする、このこととの相関関係がうかがえらしたたら、[再びいう] 奇異の感が残るであろうか。

- ② 批判od. 批判哲学の懐胎・誕生は、神の現存在問題(A)、人間靈魂の不死 (すなわち来世問題) (B) にあったのではなく、理性の二律背反の問題C) であったという。周知のようにこの三問題は KrV の第二部門 (zweite Abteilung), 先験的弁証論によって論じられる課題である。

- 1) 純粋理性の誤謬推理 (Paralogismus) がB
- 2) 純粋理性の二律背反 (Antinomie) がC
- 3) 純粋理性の理想 (Ideal) がA

「私は信仰を容れる場所を得るために知識を除かねばならなかった (od. 科学的認識の限界を設定しなければならなかった) Ich mußte also das Wissen aufheben. um zum Glauben Platz zu bekommen. 批判 [哲学] の主旨はここにあり、Kritikによって、いまや一切の“Materialism, Fatalism, Atheism, dem freigeisterischen

Unglauben, der Schwarmerei u. Aberglauben (唯物論, 運命論, 自由思想的無信仰, 狂信および迷信) また, Idealism, Skeptizism (觀念論, 懷疑論) は, その芽もろとも刈りとられえたと宣言する (同じく KrV, 第二版序文)。このように読むかぎりカントの信仰への意志はまことに断乎としたものであり, のちのカントに対する無信仰的断罪など入りこむスキはないように感じられるとともに, KrV の発端においてもまた, C よりは A, 或いは B であったように憶測されるにせよ, である。しかしその「信仰」がいかなる信仰であったかが問題なのである。啓示信仰, 聖書信仰, 世界創造者 (Welturheber) 信仰なのか, 理性信仰なのか, カントが KrV の核心に C をおいたことは, この「信仰」問題を解く鍵となる。

## 2. <Kant contra Kant>

カントの中に 2 人のカントがいる, すなわち <Kant contra Kant>。A. ショーペンハウアーや E. ヘッケルが指摘する批判期以降の Kant にとどまらない。この 2 人は夫々がたつた立場から, とくにカントの KrV と KpV の矛盾性を批評する。ショーペンハウアーは, カントの Ding an sich を意志 (超個人的意志) と規定して「意志と表象としての世界」を論述する立場から, そしてヘッケルはシニカルな唯物論的世界観の立場から。— そしてこの種のカント批評は世にあふれている。且つこれと反対の立場すなわちカント批判哲学の整合性を大前提にした部分的解說的論述も世にあふれているのではあるが —

問題はそうした表層のことよりも, もっと根底にある <Kant contra Kant> である。ショーペンハウアー的指摘が示す第一・第二批判間にあらわれた <Kant contra Kant> はある一つのあらわれにすぎない。それに先立ついわゆる der elegante Magister Kant の著作に, それはさまざまな姿をとってあらわれ出ている。

既稿「ポーブとカント」(本学紀要 No. 25, 1985) は, カントの 1755 年の著作「天界の一般自然史と理論」(Allgemeine Naturgeschichte u. Theorie des Himmels) をとり上げたものである。

私はそこで「天界自然史」を Ur-naturgeschichte と規定した。カントはまさに上記のごとく Naturgeschichte を使っているのであるが, のちの (1764 年 od. 1775 年

以降の) カントの Menschenrassen 論の立場と区別する必要からである。— Menschenrassen 論を進める過程で (通例 1775, 1785, 1788 の三論文が挙げられるのもすでに周知の通り), カントがのちに Naturgeschichte と Naturbeschreibung を区別する必要を感じ, ことがらを明晰にするためには, 前者には Physiogonie を, 後者には Physiographie という語を以てかえることを提唱した (1788 論文), ことなどについては, 同じく既稿「Physiographie und Physiogonie bei Kant — Naturgeschichte als Geschichtsphilosophie —」(「カントにおける自然誌と自然史 — 歴史哲学としての自然史 —」)(本学紀要 No. 18, 1978) に記した。

Ur-naturgeschichte とは naturgeschichte についてこのような論議が起る以前のカントの思想世界にあてられたものである。

この Ur-Naturgeschichte (しいて邦訳を与えれば「原・自然史」) は natural philosophy (自然哲学) と moral philosophy (道徳哲学, od. もっとひろい意味にとって人間の哲学) を包含している。天界自然史という名のもとにこの二つの包含はまことに奇異である。すなわち <Kant contra Kant>。

カントは本書前半で「ニュートンの諸原則によって, 全宇宙構造の体制とその力学的起源」をとき明かそうとする (Versuch von der Verfassung und mechanischen Ursprunge des ganzen Weltgebäudes nach Newtonischen Grundsätzen abgehandelt)。ニュートンの諸原則, すなわち物質の引力と斥力 Anziehung- u. Zurückstößungskraft 以外のいかなる力も想定することなしに, 宇宙 (世界) のもっとも単純なカオス (渾沌状態) から, 自然の偉大な秩序への展開を叙することができる。二つの力は等しく確實, 単純, 根源的, そして普遍的である。

カントは繰り返しいう, 「われに物質を与えよ, 私は宇宙がいかにしてそれから生ずるかを示そう。」 Gebet mir Materie, ich will eine Welt daraus bauen! das ist, gebet mir Materie, ich will euch zeigen, wie eine Welt daraus entstehen soll. 固有に引力を与えられている物質...そこら一個の物体が球状に達し自由に浮遊している球体が, 自分はその方向へと引かれる中心点を周って円形運動を呈する, ついには秩序にみちた宇宙体系, そこに単純な力学的原因以外のものを求める必要はない。こうして Kant は Newton 以上に New-

ton的となる。

「自然は渾沌のうちにあつてさえ、規則的にかつ秩序正しく行動するはかはないのであるから、まさにこの理由によって神は存在するのである。」カントはこのように別のところで述べてはいるが、ニュートンが懐いた神に対する冒瀆への畏怖はもはや消え去っている。

PascalはDescartesを評していった、「デカルトはできることなら運動の第一原因たる神の最初の一撃も、とり払ってしまったかたである。」カントにはパスカルのこの抗言はきこえてこない。DescartesをこえたNewtonを活用し、ニュートンをおそったような信仰上の苦悩は、カントには一片の語句ですませうほどのものでしかない。かわってルクレティウスLukrez、さかのばればエピクロス、レウキッポス、デモクリトスたちがKantの心情を呪縛している。

これに対し、ポーペの人間論(A. Pope: An Essay on Man, 1733)に大幅に依拠していると考えうる第Ⅲ部(「自然の諸類比に基づいて種々なる惑星の居住者を比較する試論。付・天体の居住者については」)は、「存在の大きい連鎖」の頂点としての神をうけ入れている。

もともと自然の全範囲にわたってすべてのものは連続した段階的系列ununterbrochenen Gradfolgeをなし、すべての成員を相互に関係させる永遠の調和ewige Harmonieによって連関している。神の完全性die Vollkommenheiten Gottesはわれわれの段階においても明瞭に啓示されており、最下層の部類においても、より崇高な部類においても、同じように明瞭に示されている。

諸惑星、諸天体における居住者の想定は、Great Chain of Being(「存在の大きい連鎖」)の思想と相即のものであるが、諸惑星において、より高度な理性的存在者die vernünftigen Wesen、思惟的諸自然die denkende Naturenは、引力の支配をより少なく受ける場所において、その存在の可能性が考えられるということは、カントの独創!であろうか。何れにせよ、これは大へん夢想に近い考え方である。od、夢想そのものである。たとえこの種の発想が当時カンパネラ、フォントネル、ヴォルテールなどにも見られるように時代の流行であったにせよ。...

ところでdas vernünftige Wesenとかdie denkende Naturenにおいてカントは人間od、人間に類比的なものを考えたとするなら、これはKantにおける最初の

人間論である。地球上の人類を考えるに先立って—前述のごとくそれはMenschenrassen論の形をとる—カントの人間論はPopeにならい、存在の階梯の中間者としての人間を念頭においたものであり、天使や六翼の天使長を類縁者とみただ人人間論であった。この人間論がのちのカントのAnthropologieに包摂されうるのであるかはあえて不問とする。この段階での人間論にあえてAnthropologieという語を使うとすれば、神学Theologie、神知学Thesophieと類縁関係のあるものとして、「神」学に対する「人」学とよんでみたい。のちにFeuerbachはHegel哲学から神学的残滓をとりぞき、神学を人間学に解消する作業を遂行する。カントのこの段階の人間学はFeuerbachのVorläuferである。

周知のようにカントには二つの自主講座がある。Physische Geographie(自然地理学)とAnthropologie in pragmatischer Hinsicht(実用的見地での人間学)である。自然地理学は1760年代から、人間学は1770年代からはじまる。

Menschenrassen論は前者のなかで生れた。後者を育んだものとして、イギリスの美学的文献やフランス・モラリストの作品などが考えられる。両者は全く無縁、独立した領域ではありえない。Anthropologieにおける<Kant contra Kant>はKantにとってついに未解決であった。

さて天界自然史における<Kant contra Kant>はKantをしてNewtonからPopeへの道をひらいた。Popeの作品の中核をなす「ものみなよし」というOptimismusは、少々衣をかえてカントの論述をいろどる。(しかしすぐにこの中に再び<Kant contra Kant>はうづき始めるのであるが。...)

まずは次をみよう。—

私は最良の計画に加わるために選ばれたという意味において私の存在をきわめて高く評価するものである。私は、自らの存在に誇りを抱くすべての被造物に対して、「われわれの存在は祝福されてあれ!創造者はわれわれを嘉したもうているのだ。」と呼びかけたい。神のみが無限の空間と無限の時間にわたって創造の富の全貌がくりひろげられるのを見うるであろう。しかし私は、私の立脚点から、私の貧しい理性に許された見解にもとづいて、できるかぎり遠方まで私のまわりを見わたすことにしよう。そして全体が最良なるものであり、すべてのものはこの全体との関連において良

きものであるということを一そうよく理解することに勉めよう。...daB Ganze das Beste sei, und alles um des Ganzen willen gut sei. (「オプティミズム試論 Versuch einiger Betrachtungen über den Optimismus<1759>の末尾。)

この「オプティミズム試論」は講義予告でもあった。末尾に、半年間の講義科目に論理学、形而上学、倫理学、自然地理学、純粋数学、力学をあげている。これに付せられた本論は講義にのぞむカントの基本的Einstellungをうかがうに足りる。

さてこのカントが間もなく印刷された「オプティミズム試論」のすべてを回収に乗り出す。当然生前の再刷はなく、カントはできることなら抹殺を欲したであろう。

それから7年後、1766年、Kantは40代に入っている(“Anthropologie”によればこの年令には精神発達上の重要な意味がある—前稿一参照)。Kantは奇妙な「形而上学の夢」にかかわることになる。“Träume eines Geistersehers erläutert durch Träume der Metaphysik”

Velut aegri somnia, vanae / Finguntur species (Horatius) (病人の夢のように、偽りの形が描かれる)。Somnia, terrores magicos, miracula, sagas, / Nocturnos lemures, portentaque Thessala (Hor.) (夢, 迷信的恐怖, 奇跡, 女占い師, 夜の幽霊, そしてテッサリヤの物語を(君は笑うか)。ホラティウスの書簡詩から2度ほど枕詞にしてカントは、「夢想家の楽園」das Paradies der Phantstenである「幽魂の国(あの世)」Schattenreichの物語につき合う。その一人にかのスエーデンボリもいる。

しかしその過程で、der elegante Magister Kantは、(<Kant contra Kant>), 制止の声に気付く。カンディードCandideのことばが耳にひびく。われわれはまだ地上にいる。来世におけるわれわれの運命は、いかにわれわれがこの世でわれわれの部署を管理したかにかかわっている, 空論を止め, 「何はともあれ, 庭に出て, 働かう」LeBt uns unser Glück besorgen, in den Garten gehen, und arbeiten.

ヴォルテールVoltaireはGandideを1759年に公刊していた。ヴォルテールが1755年, リスボンの大地震に抗して書いた詩はカントの関心をひかなかった。かれは, Popeに組していた。

「庭に出て, 働かう」—Kantはその後何をしたか。

この15年後(1781)KrVが発表され, ついでProlegomena, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten KrV, zweite Aufl., KpV, KU, そしてRGV...すべては年表Leistungstafelに記されている。多くの人々はそこに批判哲学の完熟をみようとした。Garve宛の書簡はKant自らがそれを否定し, なお残る, “Lücke”に苦斗している姿を示す。批判前期著作に, これまでみてきた<Kant contra Kant>は, その実態を明かすに役立つ筈である。

## 註

- 1) ガルヴェ Christian Garve (1724—1798)という, プレスラウ生れの当時有名な通俗哲学者とは1783年7/8月にすでに一度手紙のやりとりがあった。それは余り良好な文通開始とはいえない。その反対であった。(Nr. 113 u. 114~Kant Briefwechsel<Phil. Bibli. S. 219>) ガルヴェの「純粋理性批判: 書評」(ゲッティンゲン新聞, 1782年1月19日)は原文が大幅に縮小(10分の1以下)されて掲載されたため, 全くの歪曲となった。ガルヴェ自身は「世の中にこれほどそれを読むのに努力を要する書物があるのを知らない」と告白しながら全力を投じて通読したのであり, 12全紙以上にわたる長文を草する労を惜しまなかった。しかし上記の如く全く原意に反する結果を生んだ極度の短縮と匿名とがカントを激怒させ, これを知ったガルヴェはすぐにカントに書簡を送って非礼を詫び, 実情をのべ, 「私は, われわれの認識には限界があり, この限界はわれわれの感覚の中からそうした矛盾し合う諸命題が同等の明証性をもって発展させられるときにこそ見出されるものだと確信しています。...この限界をはっきりと完全に解明されたことは, 貴著のもっとも公益性のある御意図の中の一つであるとおもいます。」ガルヴェはまた, この部分の明晰さに反し, それ以降の諸原理確定の部分の晦渋さに困惑を表明しているが, この点は当時ガルヴェ一人にとどまらない困惑であった。かくしてカントも意中を打ち明ける機会をうる(1783年8月7日, an Garve) —

「晦渋さの原因は著者にも責任がある。私が12年以上もかかって考え抜いた材料の論述は, 一般の理解に適切な形をえないまま発表せざるをえなかった。そうするためにはさらに数年を要したでしょうが, すでに私は老令であり, いつまでも重荷を背負ってはいなれず,

そのため僅か4～5月のうちに仕上げてしまったのです。

「この種の学問は、各部分を修正するには全体の描出が必要であり…全体を完成させるためには、しばらく諸部分はある程度は仕上げないままにしておくことも許されるでしょう…

「私が批判Kritikで行っていることは形而上学Metaphysikではなく、これまで試みられなかった新しい学問、すなわちア・プリオリに判断する理性の批判。ロック、ライプニッツ、その他の人々も、この能力を論じているが、他の認識能力と混同している。…この[理性]能力は、その本性からして、その学問が関係させられるすべての対象を導き出し、それらを数え上げ、全認識能力におけるそれらの関連によってその完全性を証明しうる…他の学問(一番近い論理学も)はこのことはなしえない。論理学は悟性一般のあらゆる使用に関係するけれども、悟性的認識がいかなる対象に関係し、いかなる程度にまで及ぶかということは全く指示することはできないからである。そのため経験によって、或いはその他のもの(例えば数学)によって、その使用の対象が提供されるのを待っていなければならないからである。

「これらのことを正しく理解しようと期待できる方々、ガルヴェ、メンデルスゾーン、テーテンスの諸氏が、この酬いのない仕事とはいえ、回避されることのなきよう…

1798年書簡を読む上でこのような前歴を知ることが細かい心情のひだの理解に役立つであろう。

2) 「三つの問い」の文にあらわれた三個の話法の助動詞すなわち, können, sollen, dürfen の関係を概略する。

1. können は単なる可能性ではない。

können の普遍妥当性は、二つある。

ヨーロッパ法学の原理によれば、allgemeingültig (普遍妥当的)として法が妥当するには、

①quid juris (quid iurisとも書く) — 権利問題

②quid facti — 事実問題

の二原理がある。

quid jurisは理論的ないし直感的原理をなす。

一例 — 人間ハ平等ナリ

quid factiは慣習により妥当する。これがprescrip-

tion (時効)の原理をなす。

一例, lex, すなわちイギリスの慣習法にみることができる。

quid jurisのみ主張すれば法は空論と化し—これを論理主義という—, quid factiにたよれば進歩がなくなる—歴史主義—という。

H. Grotiusはquid jurisをa priori, quid factiをa posterioriと呼んだ。

KantはGrotius的法原理を、直観的領域 対 論理的領域に持ち込み、この方法をtranszendental (transzendentに対して)と呼んだ。したがって、KantのKritikは、基本的には、quid factiとしての人間理性の活動を根拠づけるためのKritik — 原理批判 — となる。

Deduktion [演繹]とは元来法律用語であるが、法適用の基本原理の証明—quid factiを利用する—となる。このことはKantがKrV, transzendente Deduktionの冒頭で明示している。

かくしてkönnenは、quid factiとquid jurisの総合がいかにして能力的に可能か、の意味となる。

2. sollen は他者の意志による束縛をいう。

つぎの文例において考える

Er soll gehen. (文脈なしにはわからない)

• duの意志 — 彼が貴方の命により行く(彼ニ行ッテモラウ)

• man (世間一般)の意志 — 彼ハ行クソウダ(皆ノ主張)

• 絶対者(神) — 彼ハ[神ノ意志デ]行カネバナラナイ

Kantのsollen使用ではこの“神”を“人間理性一般”におきかえた。

3. dürfen は、なしたければ、自由意志でせよの意。

Darf ich gehen? 行ッテヨロシイカ?

• Ja, Sie können. カマイマセン, 行キナサイ。

• Nein, Sie dürfen nicht. 行ッテハイケナイ。

否定文, 疑問文, 条件文は同じ緊張を含む(英語ではこれら三種のclauseでsomeはanyとなる)。

相手の自由意志の許容がdürfenであり、否認はnicht könnenであるが、さらに許容、否認には何ら

かの、誰かの意志があることになる。

かくして、können, dürfen, sollenは文脈——つまり実践——理論ではなく——の場で入りみだれることになる。

ここよりKantは「人間とは何か」(Was ist der Mensch?)へと、すなわちquid factiにもどる。Kantの最後の未完成作品のTitelがMetaphysikからPhysikへの“Übergang”と題された理由が上記三つの話法の助動詞の用例から理解されるであろう。同時にこの二つ Sein-Sollenの架橋がついに未完におわった理由をも…。

1) Kantは表立ってっていないが、前註にみられる如く、quid juris, quid facti: a priori, a posterioriなど、その用語と考え方も、法学(Jura od. Jurisprudenz)から、またH. Grotiusからとり入れている。これは何ら特殊なことではない。当時、学問は大学の4つの学部(Fakultät)があらわすごとく、Theologie, Medizin, Jura od. Jurisprudenz, Philosophieであった。Kantは1755年, Principiorum primorum cognitinis metaphysicae nova dilucidatio(形而上学的認識第一原理の新解明)をもってKönigsberg Universitätの哲学部の私講師に就任した。哲学部諸学科の革新において他学部には何らかの範をとりうるとしたら法学部以外には考えられないからである。

当時の哲学部は、中世の4学科Quadrivium——算術・音楽・幾何・天文学——、同じく3学科Trivium——文法・修辞[雄弁]学・論理学——(Arithmetik, Musik, Geometrie, Astronomie; Grammatik, Rhetorik, Logik)の伝統をひきつぐとともに、徐々に前者から自然科学的研究原理を育てつつあり、後者と平行して中世の「古典学」(humanitas, humanitatis)が息づきはじめていた。カントの多様な教養は、かれの旺盛な知識欲(ヤスパース的にいえばursprüngliches Wissenwollen)はもとよりであるが、このような背景を知ること理解しうる。

KantはGrundlegung zur Metaphysik der Sittenの序論でStoa以来の学問の三大分野にPhysik, Ethik, Logikをあげているのが、Physikの分野ではNewton的原理を、Ethikの分野では、自然科学的Gesetzをモデルに、かれ独自のMoralgesetzを定立

したが、Logikの分野ではモデルはGrotiusであった、とみることができる。

4) Die Gretchens Frage aller Metaphysik —D. ヘンリッヒ Dieter Henrich: Der Ontologische Gottesbeweis. 1960の Rezensionで使われたこの評語は、そのままこの世紀後半の一つのMetaphysik観をも示すものとして興味深い。周知のように、Gretchenの登場するGoetheのDrama “Faust” (Erster Teil, 1806; Zweiter Teil, 1831)は、かのG. ルカーチLukaceが「比類なき文学作品」としている意味を活かしていえば、これはGoethetumの經典である。Goethetum(C)という語を——前稿でも1~2行言及したが——Christentum(A), Luthertum(B)との対比で使っている。A, BなくしてCはない。AなくしてBはない。Aに内在する二つの流れ、Paulus主義(<信仰により恩寵あり>)とJakob説(<信仰に加え行いがありて神の義認がある>)のうち、LuthertumはPaulus主義の復活・強調であるとともに、すでにここよりして、近代ヨーロッパにおける「第三の聖書探し」が始まっている。Goethetumは、GretchenにLuthertumへの帰依を配しつつ、FaustにはPaulus, Jakobの道をもこえた。すなわちChristentumを大胆にこえた道を歩ませる。「第三の聖書探し」の一つの極限である。しかし、A, B, Cに共通していることは、人間の靈魂の“救済”問題である。

“Gretchens Frage aller Metaphysik”といとき、ヨーロッパ形而上学の大いなる特徴が語られていることになる。そしてこれを基軸に、カント形而上学の真髓を眺めるとき、その特異さはきわ立つ。

5) Kritik der Urteilskraft, 第二のAesthetik——三批判書内での「判断力批判」の位置付けのほか、第1~第3問及び第4問との関係における「判断力批判」について一言する必要性が生じる(詳細は別稿)。第3問との関係に限定してのべれば、周知のごとく、カントはただでも問題の多い第三批判「判断力批判」(1790)の中で、フリードリッヒの詩を表題その他一切明示せずに引用し、その上さらに、この長篇書簡詩の末尾6行を、余り上手とはいえ散文に独訳して絶賛している(同書、第一部、第一編、第一章、49)。

その表題は「カイト元師に寄せる書簡詩・死についての空しい恐怖と来世についての戦慄について」といい、さらに「ルクレティウス：自然論 (De Rerum Natura) 第三巻の模作」と註記が付されているものである。ルクレティウスの徹底した感覚論、その帰結としての「死」への恐怖の克服論、自然的物体としての人間存在に関する冷徹な認識、魂独自の永世の否認、従って「来世」まして「永世」を期待する人間中心的妄想の打破、が活達な筆致で描かれる。このような詩が形をくらませて“混入”しているKUは本稿の主題からいっても細心の注意をもって検討されるべき文献である。

6) Kantの批判書が惹き起した思想的情念, od. 情念的思想を、非ドイツ語圏においてみることは、他の思想家・作家の影響関係との比較考量をする上からも、きわめて注目すべき事例といえよう。

思いがけぬ受容の例をロシア語圏の詩二つに求める。(但し、in Deutsch-Übersetzung)。それと日本語のもの(これも上記と同じく auf deutsch に書き直してみた)。

Im Frühling schweift der Blick in die Ferne:  
Die lasurblauen Höhen droben .....  
Hier vor mir aber die >Kritiken< —  
Ihre ledernen Einbände .....  
In der Ferne — eines anderen Seins  
Sternenäugige Gewandung  
Und, aufschauend, besinne ich mich  
Der illusorischen Natur des Raums.  
Andrej Belyj: Stichotvorenija i poemy, Moskva-  
Leningrad 1966, 307 (Gedicht: >Am Fenster<  
aus dem Zyklus >Philosophische Schwermut<)

Ich sitze hinter dem Wandschirm. Ich habe  
So winzige Beinchen .....  
So kleine Hände habe ich  
Und so ein dunkles Fenster.  
Warm ist es hier und dunkel. Ich löse  
Das Licht, das man mir bringt.  
Doch zeige ich Dank .....  
Längst werd ich gebeten, mich zu zerstreuen.  
Doch diese Händchen ..... Ich bin verliebt

In meine runzlige Haut .....  
Ich kann einen lieblichen Traum erleben.  
Beunruhigen aber werd ich mich nicht:  
Werde nicht beunruhigen mein regloses Dämmer  
Nur dort, die Lichtgewebe am Fenster .....  
Die kleinen Hände kreuze ich.  
Auch kreuze ich die kleinen Beine.  
Ich sitze hinter dem Wandschirm im Warmen.  
Hier ist doch jemand. Ich brauche kein Licht.  
Unergründlich die Augen, wie Fensterglas  
Am runzigen Händchen — kleine Ringe.  
Alexander Block: Sobranie soičinenij, Moskva-  
Leningrad, T.I.294 (Gedicht: >Immanuel  
Kant<)

Als ich noch jung war,  
Da machte ich mich auf die Reise,  
Den Sinn des Lebens mir eigen zu machen.  
Auf den Grünen glänzte der Morgentau.  
Das junge Laub schwankte durch leiser Wind.  
Es hörte mir das Mittagsglocken.  
Doch mir war kein Ruh!

Die Nacht, darin das Schwirren des Luftangriffs  
aufhörte,  
Sah ich den bestirnte Himmel auf.  
Mein Herz beruhigt sich,  
Ich spürte dann, die Worte sich auf meinen Brust  
hineinschrieben.  
Viel Zeit verging, während ich mich am diesen  
Worten den Sinn einzulesen strebte.

Jetzt,  
Der Name Immanuel Kant naht sich mir wieder, in  
meiner Erinnerung.  
Mit “dem bestirnte Himmel über mir, und das  
moralische Gesetz in mir”.  
Jetzt, ja eben den vierzigstmalen Sommer!

Yoshiyuki BABA: An Kant. 1985

第一の詩(アンドレイ・ベルティ)も第二の詩(アレクサンドル・ブロク)も、先験的感性論に関係している。VaihingerのKommentar 2 BdeもほとんどKrVのこの当初部分に集中していることと考え併せ、KrVのこの段階からのインパクトはあらためて注目さ

れる。グリガは2人の詩人が、先験的感性論によって「靈感」をうけたと伝えている。TolstoiはKants Werkeを書斎の中央に「安置」した。(井上円了が「純粹理性批判」を四聖堂に奉納したことはすでに周

知であろう)。そしてKrVからのかの二句には傍線を引いて読んだ。上記第三の詩はこの二句にかかわっている。この詩は本稿の一つの背景を解析するであろう。